

『花のオメガと溺愛王子 ～いとし子と運命のつがい～』

著：葵居ゆゆ

ill：篁 ふみ

懐かしい夢を見た気がしてまぶたを開けると、白い光が眩しかった。いつ眠ったのか記憶にないが、気分は悪くない。息を吸うとほんのり甘いスパイスのような匂いが心地よかった。全身があたたかく、さらりと乾いていて、まるで誰かに抱きしめられているような感じがする。大切に包まれて頭を撫でてもらっているような。

「起きたか、夏芽」

髪を梳かれ、艶のある低い声にうっとりしてため息をつき、それから夏芽ははっとした。

幸徳の声じゃない。目を開けると見慣れない、褐色の顔が間近にあって、緑色の目が優しく細まった。

「おはよう、夏芽。気分はどうだ」

「……ハリード」

一気に記憶が蘇り、夏芽は唇を噛んだ。そうだ。昨夜、彼としたのだ——セックスを。

（僕は、なんてことをしたんだ）

抱かれない、と思いつめたあの衝動は、朝になったせいとおさまっていた。理性が蘇った分、置かれた状況があまりに気まずい。

身体にはハリードの手が回っている。彼が着せてくれたのか、ちゃんと下着もパジャマも身につけていて、それがいっそう後悔に拍車をかけた。流されてする性行為なんて、一番許しがたい過ちだ。

頬に触れてこようとする手を逃れて起き上がると、さっと人影が動いた。びっくりして目を向けると、ドアのそばには黒いスーツ姿の男性が二人いて、扉を開けたところだった。廊下から、銀色のワゴンを押したメイド服姿の女性が三人入ってくる。

「喉が渇いただろう。朝食も用意させたが、食べられそうか？」

昨晚寝たのとは違う部屋だと気づいて呆然とした夏芽を、ハリードが後ろから抱きしめた。彼はまだ裸だ。ちゅ、と耳に口づけてくる彼を振り解くこともできず、夏芽は急いで上掛けを引っ張った。パジャマを着ていても、後朝の姿を他人に見られたくない。

「こ、ここはどこですか？」

「留学中の俺の屋敷だ。昨日、夏芽が寝てしまってから、車で移動したんだ。泊まってもよかったんだが、自宅のほうがなにかと不自由がないから」

ハリードが答えるあいだに、メイドたちは手際よく朝食の支度を整えていく。ベッドのすぐ脇につけられたワゴンには数種類飲み物が載っていて、夏芽は俯いた。

着せられたパジャマは絹で手触りがいいし、ベッドも大きくていかにも豪華だ。部屋の調度品

も、護衛がいるのも、使用人が世話をしてくれるのも別世界だった。上善家にも使用人はいるけれど、幸徳は人が多いのを嫌うのでごく少数だけだし、夏芽自身は傅かれる立場ではなく、仕える側だと自覚しているから、自分がひどく場違いに感じられる。

ハリードは昨晚よりもずっとリラックスしているようだ。飽きずに夏芽の身体に腕を回したまま、「水を」とメイドに命じる。

「夏芽はなにを飲む？」

「……僕も水をお願いします」

彼は王族なのだと実感して、身分の高いアルファ相手に、と余計に後悔がつる。

(車で運ばれて、パジャマまで着せられて、それでも目も覚めなかったなんて、まるで気絶じゃないか。……というか、実際、意識を失ったんだろうな)

太腿にたっぷりと精液をかけられたことまでは覚えているのに、寂しく感じて目を閉じたあとの記憶がなかった。あれもたぶんハリードが始末してくれたのだろう、と思うとため息が出る。

「すみません。なにからなにまで、迷惑をかけてしまいました」

「迷惑なんてかけられてない。俺のほうこそ、手加減しきれなかったみたいですまなかった」

メイドがグラスにそそいでくれた水を受け取って、ハリードが夏芽に持たせてくれる。飲むと冷たさが心地よく、身体はいまだに熱っぽいのだと知れた。

(……やっぱり、昨日のあれは、発情期のせいなんだ)

来てしまったものは仕方ない。せめて早く終わってくれればいいのだが。

ぴったりとくっついたハリードが、労るように腕をさすってくる。

「発情がはじまったばかりだ、まだつらいだろう？　ちゃんと優しくするから、終わるまで俺の屋敷で過ごすといい」

「大丈夫です。三日後には日本に帰るので」

そっけなく言ったものの、寮に戻るのさえ、ひとりでは心許なかった。だって、ハリードを振り解けない。抱きすくめられて動けないのは、アルファの匂いを感じて身体から力が抜けてしまう、発情期特有の反応だ。

「この状態で飛行機は無理だ。延期したほうがいい」

「……とにかく寮に帰ります。薬を用意してもらえますか」

「緩和剤なら持ってこさせるが、飲んでもつらいことには変わりがないし、きみを危険な目に遭わせたくない。こんなにいい香りをさせて、歩かせたりできるものか」

すう、とハリードが息を吸い込み、夏芽は反射的に喉を反らした。体温が上がるのが感じられ、無意識に身をよじってしまう。じくりと疼くのは昨夜ハリードを受け入れた部分で、遅れて腹の奥——鋒で突かれた部分がとろけるように熱くなった。

「っ、ハリードは……どうぞ、朝食を食べてください。僕の場合は、放っておいて」

「食事は温め直せばいい。無理するな」

大きな手がパジャマの中に忍び込む。そっと触れられただけで尖りきった乳首がぴりぴりして、ああ、と声が漏れた。

「や……、だ、め、」

「だめ？ 胸を可愛がられるのは嫌いかな？」

「ん、ちが……、あ、……は、……ん、……っ」

胸がだめとかでなく、どこも触ってほしくない。二度も過ちは犯せない、と言いたかったのに、かりかりと引っ掻くように乳首を刺激されると、力が抜けてハリードにもたれかかってしまった。

ハリードは夏芽の顎を捉えて振り向かせ、ゆっくり唇を重ねた。あたたかい舌がもぐり込む。

「んむっ、……ん、……う、ん、んっ」

いやなのに気持ちよくて、涙が浮かんでくる。潤んだ視界の端、メイドたちが顔色ひとつ変えずにワゴンを遠ざけ、部屋から出ていくのが見えた。壁際に佇んでいた男性たちも静かに出てドアが閉まり、二人きりになると、もう抗いきれなかった。

きゅんきゅんと後孔が疼いている。理性とは裏腹に身体だけが昂って、押し倒されても「いや」とさえ言えない。のしかかってくるハリードの重みを受けとめながら、自分がこんなに快感に弱いなんて知りたくなかった、と夏芽は唇を噛んだ。

(終わったら避妊薬も飲まなくちゃ)

発情緩和剤は、症状が抑えられるし妊娠の確率も下げるけれど、完璧ではない。アルファの飲む制御剤も同じだ。妊娠を確実に避けるには、事後の避妊薬が必要だった。

身体が本能に抗えないなら飲むしかない、と考えると、きりきり胸が痛んだ。こんなことを考えなければいけないのが悲しい。

ハリードは愛情を込めて触れてくれるのに、と考えて目を伏せて、夏芽は愕然とした。

(——悲しい？ 触れてくれるのになにを考えているんだ、僕は)

発情していても、昨晚と違って今は理性が残っている。なのに、まるでまだ愛しあいたいみたいではないか。

これまでの人生はなにごとも、理性で制御してきた。ハリードに惹かれるのは発情のせいで、それ以上のものはない。けれど、内心で叱咤してみても、斬られるような痛みは消えなかった。むしろ悲しみは増すばかりだった。

キスされるだけで泣きたいくらいせつなくて、昨夜の疑念が再び頭をよぎった。

(違うよね。天命のつがいだなんて——絶対、ありえないはず)

夏芽が強張ったのを悟ったのか、ハリードがパジャマを脱がせる手をとめ、頬を撫でてきた。

「夏芽が心配することはない。俺がちゃんと避妊具をつけるから」

誠実にも取れる言葉にざっくり傷ついて、夏芽は顔を背けた。

「——あなたも、僕に妊娠されたら困りますもんね」

「そうじゃない、夏芽。言い方が悪かった」

ハリードが焦ったように覗き込んでくる。

「俺はきみと結婚したい」

「え？」

ぽかんとしてしまってから、にぶい痛みで襲われて、首を左右に振った。そんなこと、冗談でも簡単に言わないでほしい。

「なに言ってるんですか。僕たち、昨日出会ったばかりですよ。それにあなたは王族でしょう」
「身分は関係ない。いや、もちろん、結婚すれば身分のせいで、夏芽には苦勞をかけることがあるかもしれない」

ハリードは真剣な面持ちだった。

「クリアしなければならない課題は多い。具体的なことは今後考えなければならぬだろう。でもその前に、わかるんだ。夏芽——きみはたぶん、俺の天命のつがいだ」

言葉にされると、ぴくりと全身が揺れた。自分も同じことを感じた、なんて打ち明けられるはずもなく、夏芽はごまかすようにもう一度首を振った。

「僕はただの平凡な人間です。特別な絆で結ばれた相手がいるはずありません」

「平凡かどうかと天命のつがいの有無は関係ないだろう。それに夏芽は充分特別だ。聞いたら、成績も優秀だし、友人にも大切に思われている」

マツトは好青年じゃないか、と言われて、いつのまに彼と話をしたのだろう、と思ったが、今はそれどころではない。

「困るんです。僕には恩返しをしなければならない人がいるから、恋だとか……まして天命のつがいなんて、困ります」

「結婚しても恩返しはできるだろう。俺もなんでも協力する」

「無理です。僕にとって恩返しは、彼の役に立つことです。そばにいて、彼のために生きなければ恩返しにならないくらい、本当に大切な人なんです。他人と結婚なんて、できませんししたくもありません」

目をあわせずに告げると、ハリードは居心地悪そうに身じろいだ。脱がせかけのパジャマの上から、そっと胸に手を置いてくる。

「そんなに頑なに拒むほど、俺が相手なのがいやなのか？」

悲しげな声を聞くのはつらかった。そのとおりです、と言えれば簡単なのに嘘はつけなくて、夏芽は視線を逃した。

「……あなたじゃなくて、これは僕自身の問題です」

彼のことはなにも知らない。だが、発情した夏芽を前にしても、ハリードはずっと紳士的だった。いい人だとは思う。でも、だめなのだ。

「子供のときから決めていたんです。僕を救ってくれた恩人のためになんでもするって」

助けてもらった日の喜びは今でも鮮明だ。頭を撫でてくれる手のあたたかさや優しい眼差しがどれほど嬉しかったか、言葉では言い尽くせない。どん底から幸福の絶頂へと引き上げてくれた幸徳のためになにもしないまま、恋をするなんて許されない。

「だったら、その恩人に俺も会いに行く」

夏芽の顔をつかまえ、ハリードは視線を強引にあわせた。

「その恩人だって、夏芽が幸せになるなら、だめとは言わないはずだ。恩人は日本にいるんだろう？ そばにいなければ恩返しができないなら、俺が日本に行けばいい。何年待ってもかまわない」

「何年も待つって……」

僕は生涯を捧げるつもりです、と言いつ返そうとして、夏芽はハリードの笑顔に口をつぐんだ。きらきらした緑色の瞳には愛しさがいっぱいに溢れていて、迷いがなかった。

「俺に、きみの恋人になるチャンスをくれ」

「……」

「きみと離れることは、もう考えられない。今まで出会った誰にも、これほど深く心を揺さぶられたことはなかった。——好きなんだ、夏芽。きみが……きみを、愛している」

痛みとも、熱ともつかないものが心臓を貫く。

愛しているなんて陳腐な単語だ。物語の中でも、街中でも何度も聞いたことがあって、気にもとめずに聞き流してきた言葉なのに、ハリードの声で囁かれると、不思議と心に響いた。

「——僕、は……」

ハリード以外の誰が、これほどまっすぐに愛してくれるだろう。

きゅんと締めつけられる苦しさ唇を噛むと、ハリードは宥めるようにキスをした。優しく舐められ、抱きしめられて震えが湧き起こる。押しつけられた彼の性器は布越しにもわかるほど熱くて硬かった。下腹部が疼き、自然と膝がひらいて、夏芽は諦めて陥落した。

(逆らえないのは、発情してるからだ。それだけ)

愛しいとか、恋をしているとかじゃない。好意を寄せられて嬉しいのだって、単なる優越感みたいなものだ。

そう言い聞かせながら力を抜くと、ハリードは嬉しげに囁いた。

「夏芽。……夏芽、好きだ」

何度も繰り返しながら夏芽の膝を抱え上げる。触れると後孔は恥ずかしいくらいやわらかくて、あっけなく彼の指を、続けて彼自身を呑み込んだ。

「——ッ、あ、……、あ、……ッ」

きれぎれに声をあげながら、夏芽はせめても、とシーツを握りしめた。抱きしめあうことだけはしない、と思ったからだったが、ささやかな抵抗など意味がないほど、愛されるのは快感だった。

気持ちいいのは仕方ない、と思うしかなかった。思っていたよりも、自分の身体が淫らだっただけ。彼が達するまでに三度絶頂を味わい、精を放ち終えたハリードの長い吐息を聞きながら、夏芽は心に決めていた。

愛していると言ってくれるハリードのために、せめて彼が傷つかない言葉を選ぼう。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>